

# 『解体新書』訳述同人の「烏山松園」は「烏山松因」である

松木 明知

弘前大学大学院医学研究科麻酔科学教室

## 1 はじめに

本邦における医学，洋学の発達に大きな影響を与えた『解体新書』の重要性は指摘するまでもない<sup>1,2)</sup>。この『解体新書』の訳業に参画した主要人物は，同書「巻之一」に披見される杉田玄白，中川淳庵，石川玄常，桂川甫周の4人，そして訳業の盟主であるが名を連ねることを謝辞した前野良澤が知られている<sup>3)</sup>。さらに『解体新書』訳業の経緯を記した玄白の『蘭学事始』によって嶺春泰，烏（鳥）山松園（園），桐山正哲も参画したことが知られる<sup>4)</sup>。これらの人物の事績を明らかにすることは本邦の医学史上意義あることであろう。

『蘭学事始』で言及された3人の中で桐山は同じく弘前藩の医官であった洪江抽斎編の「直舎伝記抄」<sup>5)</sup>の解説によって彼の伝の大略が明らかにされ<sup>6-8)</sup>，嶺春泰の事績は緒方によって闡明にされた<sup>9,10)</sup>。しかし「烏（鳥）山松園（園）」については80年以上にもわたる探索にも拘らず，依然として生没年さえ明らかでなかったが，今回，彼の姓名と生年に関して重要な知見を得たので報告する。

## 2 烏（鳥）山松園（園）の事績探求の経緯

1869年に発行された『蘭学事始』<sup>11)</sup>には「烏山松園」と記されていたため，その読みは「とりやま・しょうえん」とされてきた。1930年に「蘭学事始」に注釈した野上豊一郎は「烏山松園」を「庄内藩医」としたが，その根拠は示されなかった<sup>12)</sup>。著者は40年前に鶴岡市立図書館に所蔵されている庄内藩士の史料などを調査したが，「烏

山」姓の藩士の名を見出すことは出来なかった。ところが1948年に発見された『蘭学事始』の一写本である内山本に「烏山松園」とあることなどから<sup>13)</sup>，「烏」は「鳥」の誤写と見做されて「烏山」説が主流になった。したがって1959年に緒方は『蘭学事始』に注を施した際，「からすやま・しょうえん」の読みを採用した<sup>14)</sup>。これに関連して著者は1981年に「烏山」は「からすやま」の他に「うやま」とも読める可能性を指摘した<sup>15)</sup>。このため以後の論考，例えば片桐は2000年に『蘭学事始』に訳注を施して「からすやま」ではなく「うやま」と読んだ<sup>16)</sup>。「松えん」の「えん」は内山本，長崎本には「園」とあるが，依然として同音の「園」を採用している研究書も多いが，片桐は長崎本に従って「園」を採用している<sup>17)</sup>。姓については「烏山」でなく「鳥山」であるらしいことが判明したが，それ以外については生没年を始めとして依然として不明のままであった。以上がこれまでの「烏（鳥）山松園（園）」について探索の概略である。

## 3 山脇東門の門人帳と「烏山松因」

藩政時代に北前船によって上方の文化が弘前藩に移入されたことから，著者は医学の分野でどのような交流があったかを，医師の上方への留学の面から把握しようと考え，上方の医塾の門人帳を精査したところ，山脇東門の門人帳「山脇門人帳」の中にそれと思われる人物の名を見出すことが出来た。1767年（明和4）の条に次のように記載されている。（図1）

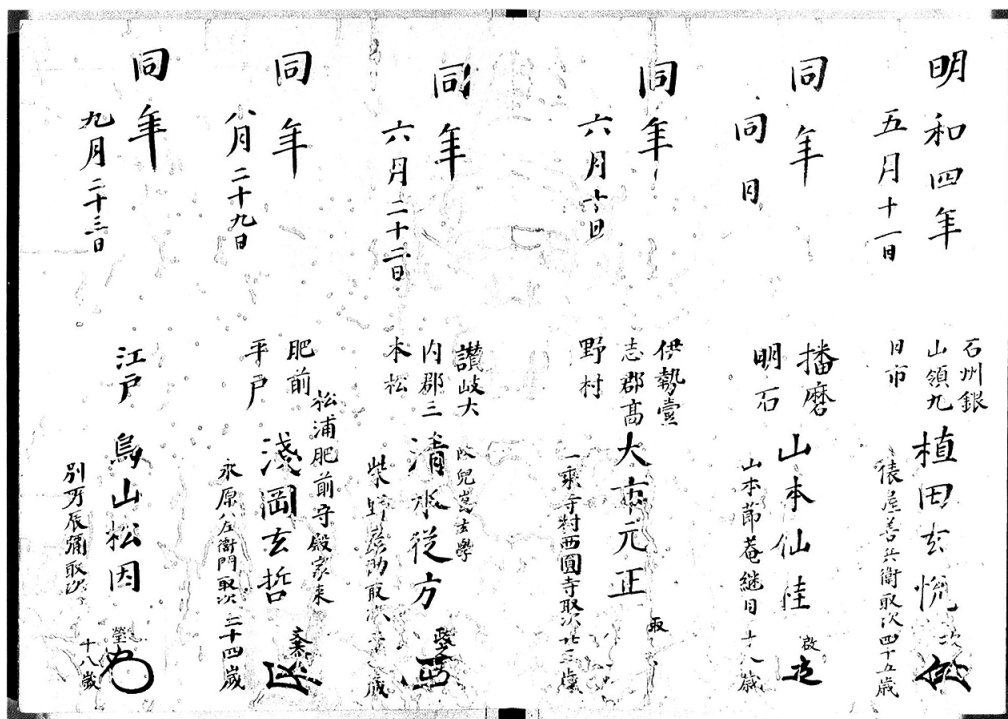


図1

同年 江戸 烏山松因 堂花押  
 九月二十三日 十八歳  
 別所辰彌取次

らかであるが、「頗る出精」した筈の「烏山」の伝が失われているのは解せない。「烏山」として改めて庄内藩関係の史料を探索したが、徒勞に終わった。

医家であること、姓名の4字の内、「烏」、「山」、「松」の3字が内山本、長崎本などの記述と同じであり、4字目の「因」(いん)は「圓」または「園」と発音上混同(in → en)され易く、「因」が「圓」や「園」と誤記された可能性が高いこと、「松因」が1767年(明和4)に18歳(数え)であったことから1760年生まれとなり、玄白たちが訳述を開始した1771年(明和8)には22歳となっており、年齢的に矛盾はないことなどから、この人物が本稿で問題にしている「烏山松圓(園)」に間違いないと考えられる。なおこの門人帳は『京都の医学史』で復刻されているが、「烏山」を誤って「鳥山」としている<sup>18)</sup>。彼に関して『蘭学事始』には「嶺春泰鳥山松圓といへる男などは、頗る出精せしが、今は則ち亡し。」<sup>4)</sup>とあるので、これが書かれた1815年にはすでに没していたことは明

「烏山」を「からすやま」と読むか「うやま」と読むかは、上に引用した史料によってもいずれかに決定することは出来ないが、「烏山」と書いて「うやま」と読む本草研究者がいた。杏雨書屋の所蔵する「本草綱目輯疏」<sup>19)</sup>の編者で江戸に居住した「烏山毅卿」である。その蔵書印は「宇山薬室」である。「烏山」の姓であるが、「からすやま」と読まれることを避け、「うやま」と読むことを示すために「宇山」の文字を使ったのであろう。残念ながら「烏山毅卿」の事績についても不詳で、「烏山松因」との関係を示す記述は「本草綱目輯疏」の中に認められないが、江戸で医家の「烏山」姓はそんなに多くはなかったと思われるので、両者は縁者でないかと推察される。したがって「烏山松因」の研究のためにも「烏山毅卿」およびその関係者について今後の探求が望まれる。

「烏山」が山脇東門の門に学んだ契機は今となっては知る由もないが、少なくとも山脇東洋の「藏志」の影響で観臓にも関心を寄せたと思われる。「烏山」が京都以外の地で研鑽を積んだか否か、また江戸に戻った時期、さらにいつ玄白らの訳述の会に入ったかも不詳であるが、これらは今後の課題である。

なお訳述の会に参加した「石川玄常」（明和9年6月19日入門）と「嶺 春泰」（宝永3年3月16日入門）の名もこの門人帳に次のように披見される。

明和九年六月十六日

江戸 石川玄常 行 花押

松本杏庵紹介 卅八歳

安永三年三月十六日

江府 嶺 春泰 泰 花押 午二十□歳

松平右京大夫殿家来 吉川玄端紹介

石川もやはり「烏山」と同様に山脇東洋の『藏志』の影響を受けて観臓に関心を持ち、玄白の訳業に参画したのであろう。嶺の入門については緒方<sup>10)</sup>が詳しく論じており、□を「九」と解読しているが、これは嶺の年齢を知った上での解読であり、現在の史料からは読めない。今後は「烏山松因」という名で、依然として詳細な伝が失われているこの人物について改めて探求する必要がある。

本稿の要旨は第117回日本医史学会学術大会で発表した。

## 参考文献および注

- 1) 小川鼎三. 『医学の歴史』. 東京, 中央公論社, 1964. p.111-27.
- 2) 小川鼎三. 『解体新書』の時代. 杉田玄白『解体新書』（酒井シヅ 全現代語訳）. 東京, 講談社, 1998. p.234-56.
- 3) 杉田玄白『解体新書』. 卷之一. 一丁表.
- 4) 杉田玄白. (緒方富雄校注)『蘭学事始』(岩波文庫). 東京, 岩波書店, 1954. p.36.
- 5) 弘前藩江戸屋敷の医官の宿直日記である. 編者の渋江抽斎は何らかの目的をもって宿直日記から必要な箇所を抄出したが, その内容は特定の事項に限定されていない. 原本は散失して不明である. 抽斎による抄出本6冊は現在慶応義塾大学北里記念図書館に所蔵されている. 著者はそれらを復刻した. 松木明知編. 『直舎伝記抄』. 弘前, 第86回日本医史学会, 1985.
- 6) 松木明知. 桐山正哲と『解体新書』. 日本歴史 1964; (197): 64-76.
- 7) 松木明知. 津軽と解体新書. 『続津軽の医史』. 弘前, 津軽書房, 1975. p.7-10.
- 8) 松木明知. 2010年7月10日に隣松寺(弘前市西茂森町2-12-1)境内に「桐山家の墓碑」の顕彰碑を建立した. 現存するのは「七代正哲」の墓碑であるが, 過去帳には初代からの戒名が披見される.
- 9) 緒方富雄. 嶺 春泰伝. 日本医史学雑誌 1968; 14: 201-49.
- 10) 緒方富雄. 嶺 春泰伝追加. 日本医史学雑誌 1969; 15: 214-7.
- 11) 杉田玄白. 『蘭学事始』. 東京, 天真樓, 1869. 「下之巻」二丁表.
- 12) 野上豊一郎校注. 『蘭学事始』(岩波文庫). 東京, 岩波書店, 1930. p.93.
- 13) 内山孝一. 『和蘭事始「蘭学事始」古写本の校訂と研究』. 東京, 中央公論社, 1974. p.160.
- 14) 文献4. p.36. p.86の注には「烏山松圓一不詳」とある.
- 15) 松木明知. 烏山松因の研究—「からすやま」か「うやま」か—. 日本医史学雑誌 1980; 27: 123-9.
- 16) 片桐一男全訳注. 『杉田玄白 蘭学事始』. 東京, 講談社, 2000. p.114.
- 17) 片桐一男. 『知の開拓者杉田玄白—「蘭学事始」とその時代』. 東京, 勉誠出版, 2015. p.172.
- 18) 京都府医師会医学士編纂室編. 『京都の医学史 資料篇』. 京都, 思文閣出版, 1980. p.275.
- 19) 公益法人武田科学振興財団杏雨書屋所蔵(杏6305).